

比較経済研究所

【2025 年度 大学評価総評】

比較経済研究所は、研究会、カンファレンス、シンポジウム、講演会を活発に行い、その成果を適切に外部へ発信している。比較経済研究所シリーズ 1 冊と英文学術ジャーナル 1 冊を目標通り刊行しており、2024 年度の年度末報告で「理念・目標」の自己評価が S になっていることが肯ける。学生向けの講演会を 2 回開催し、多くの学生の参加があったことも、本研究所の存在意義を高めている。2025 年度は英文ジャーナルの特集号に査読付き論文が掲載されるようになることは、研究水準のいっそうの高度化と質保証とを達成することが期待される。

【2025 年度 自己点検・評価結果】

I. 改善・向上の取り組み

(1) 2024 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2024 年度大学評価結果総評】(参考)

今回の評価のもとになる 2024 年度自己点検・評価シート、2023 年度中期目標・年度目標達成状況報告書、2024 年度中期目標・年度目標達成状況報告書を拝見する限り、比較経済研究所自身による「現状分析」及び「各基準の改善・向上」の回答は、ほとんど全ての項目において例年通り役割を果たしているとのことであり、長年の経験によって培われ、築きあげられてきた基盤によって確実に当研究所が機能していることは極めて評価に値する。特に内部質保証に関しては、年度末に外部評価委員を比較経済研究所にお招きし、外部評価を依頼していることは特筆に値する。

研究活動に関しては、これまでを引き継いだ形での比較研シリーズ・英文ジャーナルの刊行、比較研シリーズプロジェクト、兼担プロジェクトの実施も確実に進められており、社会貢献という意味では、学内で講演会、シンポジウムを昨年度も複数回開催し、今年度も同様な計画を立てておられるということで、極めて堅実かつ確立した研究組織であるといえよう。

さらに期待される研究所と大学院の連携については、本年度より本学博士修了者を対象とする法政大学附置研究所研究員の募集も開始しており、グローバル化についても比較研シリーズ・プロジェクトの代表者にベトナム、中国出身者がいるのをはじめ、プロジェクト・メンバーに海外からの研究者が増えているなど、人材育成や国際化に向けて着実な改革を進めていることが高く評価できる。

【2024 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2024 年度は、学部生向けの公開講演会をハイブリッド形式で実施し、対面会場となった多摩キャンパスには多くの学生が参加した。大学院生を対象とした講演会は、社会人学生の便宜を図る形で市ヶ谷キャンパスにて開催された。比較経済研究所では、これらに加えて、国際シンポジウムや研究会も対面で活発に実施された。教授会終了後に行われる比較研サロンがコロナ禍以降初めて再開され、研究者間の対話と交流を深める機会となった。研究会・コンファレンスの開催形態については、対面を基本としつつも、参加者の利便性や企画の趣旨に応じてオンラインも適宜活用している。また、研究所が毎年発行する英文機関誌 Journal of International Economic Studies においては、本年度より特集号に掲載される論文にも査読制を導入し、掲載論文は全て査読付きとなった。これにより、学術的な質の一層の向上が図られた。今後もこうした柔軟かつ質の高い研究活動を継続し、比較研ならではの国際的かつ実証的な研究の展開を目指す。

(1) 改善・向上の取り組み(教員・教員組織)

<p>研究所(センター)内で教員の研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るために、組織的な取り組みを行い、成果を得ていますか。</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取り組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>A(概ね従来通りである又は特に問題ない)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。</p>		

Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。

《内容》

(2) 改善・向上の取り組み（社会連携・社会貢献）

社会連携・社会貢献に関する取り組みにより、地域や社会の課題解決等に貢献し、大学の存在価値を高めることにつながっていますか。 <small>＜対応する大学基準：社会連携・社会貢献活動の状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</small>	S. さらに改善した又は新たに組み込んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	S(さらに改善した又は新たに組み込んだ)
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
《内容》 本年度からは、特集号に掲載される論文についても査読を経る体制を整え、全論文を査読付きで掲載できる体制へと転換した。これにより、刊行物全体の学術的信頼性と水準が一段と高まった。今後も、柔軟性を保ちつつ、質の高い研究活動を推進し、国際的・実証的な学術成果の発信を続けていく。		

II. 全学的な自己点検・評価結果より見出された重点的な評価項目

(1) 自由を生き抜く実践知を体現する取り組み

研究所（センター）における「実践知」を体現する取り組みについて、改善・向上を図っていますか。 <small>＜対応する大学基準：社会連携・社会貢献活動の状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</small>	S. さらに改善した又は新たに組み込んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A(概ね従来通りである又は特に問題ない)
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
《内容》		

III. 2024 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	理念・目的	
中期目標	国際比較の観点から、わが国を中心とするアジア諸国と先進諸国の経済社会分析を推進する	
年度目標	法政大学内とともに、他大学、研究機関、企業の研究者とのネットワークを構築しつつ、研究成果の一部を書籍等で社会に公開する	
達成指標	書籍を 1 冊以上刊行する。英文学術ジャーナルを 1 冊以上刊行する。	
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	比較研シリーズ 1 冊と、英文学術ジャーナル 1 冊を刊行した。2013 年 3 月発行以降の比較研シリーズについて、電子書籍を出版した。本年度から特集号を査読付きに変更した
	改善策	—
評価基準	内部質保証	
中期目標	定期的に内部評価を行う	
年度目標	質保証委員会を開催し、その結果を研究所の運営にフィードバックする	
達成指標	質保証委員会報告書を作成し、運営委員会に報告する	
年度末	執行部による点検・評価	
	自己評価	A

報告	理由	2024年5月10日と2025年2月28日に質保証委員会を2回開催して報告書を作成し、同日の運営委員会で報告した。
	改善策	—
評価基準		研究活動
中期目標		理念・目的に沿った研究を推進する
年度目標		法政大学内、他大学、研究機関、企業と連携したプロジェクトにより研究を推進する。特に大学院生、大学院卒業生をプロジェクトに加えて、研究発表の場を提供する
達成指標		各プロジェクトで研究会を行うとともに、コンファレンスまたはシンポジウム等を開催する
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	比較研シリーズプロジェクトにおいて、中間報告コンファレンスと複数回の研究会・シンポジウムを実施した。
	改善策	—
評価基準		社会連携・社会貢献
中期目標		研究成果を学部生、大学院生、卒業生、一般市民に公開する
年度目標		学内で講演会、または、シンポジウムを実施する。昨年に引き続き、大学院経済学研究科と連携事業を行う
達成指標		学内で講演会、または、シンポジウムを2回以上開催する
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	5月と10月に主に学部生に向けた公開講演会をハイフレックスで行い、10月に大学院との連携事業として、講演会を市ヶ谷キャンパスで行った。
	改善策	—
<p>【重点目標】 研究活動の年次目標である、「法政大学内、他大学、研究機関、企業と連携したプロジェクトにより研究を推進する。特に大学院生、大学院卒業生をプロジェクトに加えて、研究発表の場を提供する」</p> <p>【目標を達成するための施策等】 比較研シリーズを中心としたプロジェクトのコンファレンスを行うとともに、大学院連携強化事業として、大学院生、大学院卒業生を報告者、オーディエンスとするシンポジウム等を開催する</p> <p>【年度目標達成状況総括】 比較研シリーズの出版を例年通りに行った。比較研シリーズプロジェクトでは、研究会、シンポジウムなどもコロナ禍以前の頻度で実施している。学部生向けの公開講演会を2回、ハイフレックスで行い、多くの学部生が対面で参加した。大学院連携強化事業として、講演会を市ヶ谷キャンパスで行った。さらに、本年度より、英文ジャーナルの特集号も査読付き論文を選択できるようにした。また比較研シリーズ出版において、日本語を母語としない研究者の英語論文を日本語に翻訳する際に助成をおこなった。</p>		

IV. 2025年度中期目標・年度目標

評価基準	理念・目的
中期目標	国際比較の観点から、わが国を中心とするアジア諸国と先進諸国の経済社会分析を推進する
年度目標	法政大学内とともに、他大学、研究機関、企業の研究者とのネットワークを構築しつつ、研究成果の一部を書籍等で社会に公開する
達成指標	書籍を1冊以上刊行する。英文学術ジャーナルを1冊以上刊行する。

評価基準	内部質保証
中期目標	定期的に内部評価を行う
年度目標	質保証委員会を開催し、その結果を研究所の運営にフィードバックする
達成指標	質保証委員会報告書を作成し、運営委員会に報告する
評価基準	研究活動
中期目標	理念・目的に沿った研究を推進する
年度目標	法政大学内、他大学、研究機関、企業と連携したプロジェクトにより研究を推進する。特に大学院生、大学院卒業生をプロジェクトに加えて、研究発表の場を提供する
達成指標	各プロジェクトで研究会を行うとともに、コンファレンスまたはシンポジウム等を開催する
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	研究成果を学部生、大学院生、卒業生、一般市民に公開する
年度目標	学内で講演会、または、シンポジウムを実施する。昨年に引き続き、大学院経済学研究科と連携事業を行う
達成指標	学内で講演会、または、シンポジウムを2回以上開催する
<p>【重点目標】 研究活動の年次目標である、「法政大学内、他大学、研究機関、企業と連携したプロジェクトにより研究を推進する。特に大学院生、大学院卒業生をプロジェクトに加えて、研究発表の場を提供する」</p> <p>【目標を達成するための施策等】 比較研シリーズを中心としたプロジェクトのコンファレンスを行うとともに、大学院連携強化事業として、大学院生、大学院卒業生を報告者、オーディエンスとするシンポジウム等を開催する</p>	

IV-2. 2025年度中期目標・年度目標達成状況報告書

比較経済研究所

評価基準	中期目標 (2022-2025年度)	年度目標	達成指標	年度末報告		
				教授会執行部による点検・評価（教授会承認）		
				自己評価	理由	改善策
理念・目的	国際比較の観点から、わが国を中心とするアジア諸国と先進諸国の経済社会分析を推進する	法政大学内とともに、他大学、研究機関、企業の研究者とのネットワークを構築しつつ、研究成果の一部を書籍等で社会に公開する	書籍を1冊以上刊行し、英文学術ジャーナルを1冊以上刊行する	A	比較研シリーズ1冊と、英文学術ジャーナル1冊を刊行した。	—
内部質保証	定期的に内部評価を行う	質保証委員会を開催し、その結果を研究所の運営にフィードバックする	質保証委員会報告書を作成し、運営委員会に報告する	A	2025年5月15日と2026年3月3日に質保証委員会を2回開催して報告書を作成し、2025年5月15日と2026年3月6日の運営委員会で報告した。2月12日および19日に2名の外部評価委員を比較研に招き、外部評価をしていただいた。	—
研究活動	理念・目的に沿った研究を推進する	法政大学内、他大学、研究機関、企業と連携したプロジェクトにより研究を推進する。特に大学院生、大学院卒業生をプロジェクトに加えて、研究発表の場を提供する	各プロジェクトで研究会を行うとともに、コンファレンスまたはシンポジウム等を開催する	A	比較研シリーズプロジェクトにおいて、中間報告コンファレンスと複数回の研究会を実施した。	—
社会貢献・社会連携	研究成果を学部生、大学院生、卒業生、一般市民に公開する	学内で講演会、または、シンポジウムを実施する。昨年に引き続き、大学院経済学研究科と連携事業を行う	学内で講演会、または、シンポジウムを2回以上開催する	A	5月と10月に主に学部生に向けた公開講演会を対面で実施し、10月に大学院との連携事業として、講演会をオンラインで行った。	—

自己評価について

- S 目標を十分達成し、質の向上が顕著である。
- A 目標をほぼ達成し、質の向上が見られる。
- B 目標の達成が不十分である。
- C 目標が達成できていない。

【重点目標】	【目標を達成するための施策等】
研究活動の年次目標である、「法政大学内、他大学、研究機関、企業と連携したプロジェクトにより研究を推進する。特に大学院生、大学院卒業生をプロジェクトに加えて、研究発表の場を提供する」	比較研シリーズを中心としたプロジェクトのコンファレンスを行うとともに、大学院連携強化事業として、大学院生、大学院卒業生を報告者、オーディエンスとするシンポジウム等を開催する。
【年度目標達成状況総括】	
比較研シリーズの出版を例年通りに行った。比較研シリーズプロジェクトでは、研究会、シンポジウムなどもコロナ禍以前の頻度で実施している。学部生向けの公開講演会を2回、ハイフレックス・対面で行い、多くの学部生が対面で参加した。大学院連携強化事業として、オンライン講演会を実施した。さらに学部教員間の交流から始まった比較研サロンについても大学院生に参加を呼びかけ、1回目は市ヶ谷キャンパス対面で、2回目はオンラインで開催した。	